

平田 禿木

夏目さんと英吉利

夏目さんと英吉利

もう二十年近くになる、夏目さんの訃に接した時、自分は次のように書いた。

何だか大木が倒れて、急にあたりが寂しくなった心持がしてなりません。夏目さんというと、あのシモンズの Great Writer と同じことが憶い出されます。Great Writer というのは、劇作家にしたら沙翁などは勿論第一に指を折られるのですが、そこまでいかずとも、スコットとか

バルザックというような、一方稍大衆的ややという嫌いもありましようが、舞台の大きい、広く世間にアツピールする、普遍の才分をきたえ上げた作家をいうのです。花にしたらず桜と違ってよいでしょう。幽花一枝という趣はないが、万人の眼に映る、こぼれるような美しさに充ちているのです。夏目さんはその天分と努力とに依つて、たしかに斯うした域にまで到達されたと思います。藤村君とうそんなども傑れた作家ではありませんが、何やら斯う梅の花といった風の、限られた眼にアツピールするよう
に思われます。勿論これは悪い意味ではないので、初め

多少侮蔑の意で用いられたマイナア・ポエツトという言葉
 葉が、今は却て一種幽趣微韻ゆうしゆびいんを伝える純粹の詩人という
 意になっていると同じです。藤村君などには何うしても
 まだこのマイナアという趣が脱しきれないように思われ
 ます。そこがまた大きに面白いところで、料理屋にした
 ら、大分に凝った物を客の卓しよくに供する、瀟洒しょうしやな旗亭きていと
 いう趣があります。夏目さんとなると、何うしても亀清かめせい
 とか柳光亭りゆうこうていとでもいうような、推しも推されぬ堂々た
 る大屋台で、広間では多人数の宴会も出来る、と行って、
 水際や植込みの蔭には洒落れた離れもあって、望みとあ

れば、折々茶風の卓をもしつらえられるという、何うしても名代なだいの、大がかりの家といった風が見られます。

夏目さんの初期の作では、私はあの「ふた夜」「一夜」という小篇を非常に面白いものに思います。何ですか、

「草枕」のエチュウドとも見られますと云ったら、夏目さんは会心の笑みを洩らされたのを今に忘れませぬ。中頃の物では、代助というのが主人公になっている、「それから」が特に傑れているように思われます。世間の人気にめげず、今まで容易に賞讃の辞を氏の作に呈さなかつた批判家が、「始めて文芸の大道に歩を着くるものな

り」と嘆賞したのがこの作ですが、全くその通りに思われます。昨年あたり書かれた思い出の記の或る部分なども、亦^{また}非常に嬉しく読まれました。最近の物では、何と云ってもあの絶筆になった「明暗」の断篇です。書き方とか技巧とかいう点ではないのですが、全体の精神に於て、正に彼の^かエゴイズムを笑うメレディスの Comic Spirit に触れているのが、あの一篇であろうと思います。近頃は大分大陸の物なども読まれたように聞きましたが、何と云っても英吉利^{イギリス}の物をその素地としていられたので、英文学界の諸氏、また私達の特に氏の逝去を惜しむのも、

全くこの点にあらうと思ひます。

その後一度、ゆつくり漱石全集を繙ひもといて、夏目さんの全貌を窺いたいと思ひながら、つい機会がなくて、今に果さずにいるが、氏に対する大体の感想に於ては、今も全く変わらずにいる。夏目さんの英文学から受けた影響というと、それはそう直接のものではないように思われフランスる。即ち、ジョオジ・ムア一の仏蘭西文学に於けるように、何々の作は誰の何々に当っているのではなく、寧ろシングのように、何とはなしにその気分、素地が深く深く

浸み込んでいる方であるらしい。よく「虞美人草」をメ
レデイス張りと言うが、それも唯、あの絢爛けんらんの上なき
文章そのものだけではあるまいか。高義に於ける客間の
コメデイイとしてのコツが英吉利のあの文豪風に手に入
って来たのは、却かえつて後のずっと円熟した作にあるよう
である。先頃歿した英作曲界の巨匠エルガアの肖像を出
して見たが、夏目さんは実に酷ひどく似ている、殆ほとんどもう
生き写しである。芸術家というより紳士といった趣も全
く同じである。あの位似ている二人は殆どない。それ程
までに夏目さんは英吉利風になりきっているのである。

知らず識らずのうちに、その気分、精神に感染して仕舞
っているのである。それが凡て自然で、強いて学ぶとか、
気取るとかいう跡は微塵もない。その作もまた同様であ
ると思う。

夏目さんの倫敦ロンドンの宿を自分も知っている。河向うの本
所じよといつた、労働者の多いバタツシイ公園から遠くない
クラパムにずっといたのだ。ザ・チエースというあの通
りも、コムモンの方へ近い上手かみてになると、蔦つたや鉄銭花な
どを門かどにからました、幾分瀟洒とした邸宅もあつたが、
宿はずつとその裾の方になつていて、場末に見る侘わびびし

い住居が軒を並べていた。スピンスタアの標本ともい
べき未婚の姉妹が主人^{あるじ}で、老耄した退職の陸軍大佐が同
居して、その老人が地階の表ての一室を客間兼食堂
にして、家の者や他の下宿人は地下室で食事をし、夏目
さんは三階のベッド・シツテイニング・ルウムへ陣取っ
て、チェアリング・クロスあたりへ古本屋をひやかしに
行く以外には、殆ど外出もしなかつたらしい。実に侘び
しい、しがないその日を送っていられたのだ。旅行をし
て海水浴地や鉱泉地の清新な、而も^{しか}一向に贅沢でない宿
へ落ち着くと、夏目さんはなぜ斯ういうところへ出かけな

かったのだらうと、友達とよく話しあったのであった。が、倫敦場末の下宿籠城三年の成果として、直接にしては「文学評論」として知られている、あの十八世紀英文学の傑れた批評と、間接にしては等身に余るあの立派な創作が生れたのである。

大器晩成とでも云おうか、夏目さんは長いこと鳴かず飛ばずでいたのだ。大学を出て間もなく、十八世紀英文学の自然といった題目で、当時の「哲学雑誌」へ初めて一文を公にしてから、英吉利から帰朝後、「ほととぎす」紙上へ「我輩は猫である」を連載するまでは、幾年の間

絶対に沈黙を守っていた。「帝国文学」が出て、赤門から諸才人の輩出した際も、夏目さんは独り田舎にいて、全然その新気運の外に立っていた。

独逸文学の藤代素人氏と携えて外遊する際、学士会か何処かで、その送別の小宴が催されたが、その席にいた人の話を聞くと、神田男などが例の江戸弁で軽く氏を揶^ゆして、夏目さんは終始黙って、唯微笑していたそうである。ところが、上野精養軒かで「明星」一派の同人の会のあった折、夏目さんは鷗外博士と対^{むか}って席に就かっていたが、次々に静かにその口を洩れる警句に、森さ

んの方が初終しよつちゆう受け太刀だったのには誰も皆意外と驚いたのだった。一ひと度潮流たびに乗り出すと、人もああまで変るものかと思った。森田草平君などは漱石門下でも、警句とパラドックスにかけては第一人者という豪の者だが、その草平君が先生には初終ぎゆうぎゆういう目に会わされていたらしい。書齋ないし乃至風呂場に於ける漱石、草平の禅学問答をそのまま筆記したら、立派にメレデイス小説の一場面になるかも知れない。(九年八月一日)

(『浪漫古典』 昭和九年九月)

日本文学電子図書館

夏目さんと英吉利

著 者：平田禿木

制作者：宮澤一郎

底 本：「漱石追想」

岩波文庫、岩波書店

2016年3月25日 第1刷発行

日本文学電子図書館